

生誕150年 “管弦楽の魔術師 モーリス・ラヴェル” 第2回

プログラム

今日のCDコンサートは、今年生誕150年に当たる、20世紀初頭、フランス音楽の黄金時代を開花させた大作曲家、モーリス・ラヴェルにスポットを当てた特集の第2回目をお送りします。

1902年から03年にかけて作曲された弦楽四重奏曲の成功によって、フランス第一流の音楽家の地位を確立したラヴェルは、1902年にドビュッシーの歌劇「ペレアスとメリザンド」の初演を聴き、深い感動を受けて、ラヴェルとドビュッシーはここではじめて出会うことになりました。ドビュッシーの影響により、新しい音の世界を試みていたラヴェルは、しばしばドビュッシーの忠実な後継者とされたりもしましたが、色彩的な音の効果をういた手法は似ていても、ドビュッシーが印象主義、象徴主義と呼ばれ、音を一音一音の細胞のように色彩を持った音色としてとらえることで、調性に縛られない全音音階を使って輪郭をぼかす手法に終始したのに対し、ラヴェルは、構造や形式はむしろ、輪郭を浮き立たせる線的な明確さがあり、古典主義的な要素を持っています。もうひとつラヴェルといえば、ムソルグスキーの「展覧会の絵」をはじめ、他の作曲家の作品を数多く管弦楽のために編曲していますが、それだけに留まらず、自作のピアノ曲の多くを好んで管弦楽に書き換えています。オーケストレーションの常識的な理論を破り、新しい効果と色彩の華麗なパレットを計算して生み出す手腕は、まさに「管弦楽の魔術師」と呼ばれるゆえんではないでしょうか。また、スペイン国境に近いバスク地方のシブールで生まれたことや、母親がスペイン育ちのバスク人だったこともあり、ラヴェルはスペインを好み、スペイン要素の強い作品を数多く残した作曲家でもありました。ラヴェルは1920年に発表した「ラ・ヴァルス」あたりから新しい世界へ移っていきます。動的な感情が強くなりますが、ジャズに関心を抱き、ヴァイオリン・ソナタや幻想劇「こどもと魔法」にジャズの手法を取り入れています。1927年12月にアメリカからの招聘でボストン響などを指揮、4ヶ月に及ぶ演奏旅行を行ないました。1932年10月、ヨーロッパからの演奏旅行帰国後に自動車事故にあい、この事故がもとで、脳の疾患を起こし、病状は次第に悪化、高名な脳外科医の手術も受けていましたが、最後の脳の手術の甲斐もなく、1937年12月28日、フランスのモンフォル＝ラモーリーで62年の生涯を閉じました。(中川)

モーリス・ラヴェル (1875~1937) :

序奏とアレグロ (ハープとフルート、クラリネット及び弦楽四重奏のための)

グザヴィエ・ドウ・メストレ(ハープ)/上野由恵(フルート)/金子平(クラリネット)/エウレカクアルテット
(2025.6.11 紀尾井ホールでのLive)

ピアノ協奏曲ト長調

マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)
小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1982.6.22 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

スペイン狂詩曲

セルジユ・チェリビダック指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団
(1994.5.13 ケルン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

亡き王女のためのパヴァーヌ

モーリス・ラヴェル(ピアノ) (1922年ピアノロールによる自作自演)
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1986.2.23 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

海原の小舟(組曲“鏡”第3曲)

ミッコ・フランク指揮パリ管弦楽団(2012.12.19 パリ、サル・プレイエルでのLive)

道化師の朝の歌(組曲“鏡”第4曲)

ボレロ

ピエール・デルヴオー指揮NHK交響楽団
(1978.11.17 NHKホールでのLive)

曲 目 解 説

ラヴェル：序奏とアレグロ（ハーブとフルート、クラリネット及び弦楽四重奏のための）

1904年、ドビュッシーはフランスのピアノ・メーカー、プレイエル社の新型の半音階ハーブの普及のために、考案者のリヨンから依頼を受け、ハーブと弦楽合奏のための「神聖な舞曲と世俗的な舞曲」を作曲しました。当時ピアノ・メーカーはプレイエル社とエラール社がしのぎを削っていましたが、翌1905年、今度はエラール社がこれに対抗する形で、ラヴェルに作曲を委嘱、1905年6月に完成したのが「序奏とアレグロ」です。1906年に出版、1907年2月22日にフランス写真協会ホールで初演されました。エラール社のハーブはダブル・アクション方式のペダル付きというもので、現代のハーブの原型となつたのに対し、プレイエル社の発明品は忘れ去られた存在になっています。曲はハーブとフルート、クラリネットおよび弦楽四重奏による七重奏曲ですが、カデンツァを含んだ室内楽編成のハーブ協奏曲と言えるかも知れません。ハーブの魅力がストレートに表現された典雅な名曲です。

★フランスが誇る現代最高峰のハーピスト、グサヴィエ・ドウ・メストレ(1973～)が、日本の俊英たちと共演した演奏。

ラヴェル：ピアノ協奏曲ト長調

ラヴェルは、1927年末から1928年に行なったアメリカでの演奏旅行が大成功だったことから、さらに大規模な2回目の演奏旅行を計画し、自身がソリストを務めることを前提としたピアノ協奏曲の作曲を考えました。数多くのすぐれたピアノ曲を書いていたラヴェルは、57歳になってようやくピアノ協奏曲を書いたのです。曲は1929年に着手しますが、「左手のためのピアノ協奏曲」を同時進行で作曲していたため、先に「左手のためのピアノ協奏曲」が1930年に完成し、**ピアノ協奏曲ト長調**は1年後の1931年に完成しました。初演は健康と自身の力量を考慮して、ピアノ独奏を名ピアニスト、マルグリット・ロンに任せ、ラヴェルの指揮、ラムルー管弦楽団によって、1932年1月14日、パリのサル・プレイエルで行なわれました。作品はマルグリット・ロンに献呈されています。めまぐるしい両端楽章に挟まれた第2楽章は、深いロマンティズムをたたえた、ラヴェルの音楽の中でも最も美しい楽章です。伝統的なピアノ協奏曲の構成法によって作曲されていますが、軽妙洒脱な書法でラヴェルの個性が最も表れている傑作です。

第1楽章 アレグラメンテ 第2楽章 アダージョ・アツサイ 第3楽章 プレスト

★名女流ピアニストマルタ・アルゲリッチ(1941～)と、小澤征爾(1935～2023)指揮によるスリリングな快演。

ラヴェル：スペイン狂詩曲

「スペイン狂詩曲」は、1907年から1908年にかけて作曲されたラヴェル最初の管弦楽曲です。第3曲の「ハバネラ」は1895年に2台のピアノのために書かれた作品をオーケストレーションしたのですが、他の3曲は最初2台のピアノのために作曲した後、すぐにオーケストレーションを施し、「ハバネラ」を加えて4曲からなる管弦楽曲にしました。初演は1908年3月15日、エドゥアール・コロヌ指揮コロヌ管弦楽団によって、パリのシャトトレ座で行なわれました。ラヴェルのスペインへの思いが強く表れた曲ですが、こんなエピソードも残されています。1904年に初演されたドビュッシーの「版画」第2曲の「グラナダの夕べ」を聴いたラヴェルは、自作の「ハバネラ」と似ていると周囲に漏らしていたらしく、スペイン狂詩曲の出版譜には、ハバネラのタイトルの下にオリジナルを主張するため、作曲年である「1895」を入れたのです。曲はスペインの民族的リズムを巧妙に響かせ、エキゾチックな香気を漂わせています。ラヴェル30代の名曲です。

第1曲 夜への前奏曲 第2曲 マラゲーニャ 第3曲 ハバネラ 第4曲 祭り

★フランス音楽を得意としていたルーマニアの巨匠セルジウ・チェリビダッケ(1912～1996)のケルン公演での名演奏。

ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

「亡き王女のためのパヴァーヌ」は、パリ音楽院在学中の1899年に作曲されたピアノ曲で、11年後の1910年にオーケストラ用に編曲されました。パリのルーブル美術館にあるスペインの画家ヴェラスケスの描いた若い王女の肖像にヒントを得て作曲したと伝えられ、原曲のピアノ曲は発表以来好評で、各所のサロンで盛んに演奏されました。しかしラヴェルはかえってそれを嫌い、のちの管弦楽編曲に繋がったと考えられています。曲はラヴェルのパトロンであったエドモンド・ポリニャック公爵夫人に献呈されました。「パヴァーヌ」は16世紀頃に流行したスペインに起源を持つゆるやかな舞曲で、高雅で感傷的な旋律を持った名曲です。

★大指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤン(1908～1989)の名演奏と、ラヴェル自身のピアノ演奏もお楽しみください。

ラヴェル：海原の小舟（組曲“鏡”第3曲）

ラヴェル：道化師の朝の歌（組曲“鏡”第4曲）

ラヴェルは、1905年、30歳の時に「蛾」、「悲しい鳥」、「海原の小舟」、「道化師の朝の歌」、「鐘の谷」の5曲からなるピアノのための組曲「鏡」を作曲しました。このうち「海原の小舟」が1906年に、「道化師の朝の歌」が1918年に管弦楽用に編曲されました。ピアノ版は1906年1月6日に初演され、管弦楽版の初演は「海原の小舟」は1907年2月3日、ピエルネ指揮コロヌ管弦楽団によって、「道化師の朝の歌」は1919年5月17日、ルネ・パトン指揮パドル管弦楽団によってパリで行なわれました。ラヴェルは「アパッシユ」という名の芸術家サロンのメンバーでしたが、それぞれ画家のポール・ソルドと批評家のミシェル・カルヴオコレッシに献呈されました。波の激しい動きとそれに遊ばれる小舟を鮮明に描き出した「海原の小舟」、スペインの道化師の物語を激しいリズムと民謡風の旋律で情熱的に描いた「道化師の朝の歌」、どちらも印象深い名曲です。

★フィンランドの俊英ミッコ・フランク(1979～)指揮による「海原の小舟」と、フランスの名指揮者ピエール・デルヴォー(1917～1992)指揮N響による2曲。デルヴォーは65年と78年の2回N響に客演しましたが、特に78年はどの曲も心に残る名演奏を披露しました。

ラヴェル：ボレロ

1928年7月から10月にかけて、ラヴェルはロシアの著名な女流舞踊家、イダ・ルビンシュテインからの委嘱により、最後のバレエ音楽となった「ボレロ」を作曲しました。初演は1928年12月22日イダ・ルビンシュテインのバレエ団とストララムの指揮により、パリ・オペラ座で行なわれ、大成功を収めました。その後、イダ・ルビンシュテインが持っていた1年間の独占権がなくなると、「ボレロ」は世界各地で演奏されるようになり、ひとつの流行のようになり、瞬く間に世界中に知られる人気曲となりました。16小節の主題が延々と反復され、2小節のボレロのリズムは169回反復されます。変化は音色と唯一の長大なクレッシェンドに委ねられるのです。伝統的な作曲原理を根底から覆した傑作です。